

ブルガリア・ポーランド
短期緊急派遣隊員調査報告書

ブルガリア・ポーランド 短期緊急派遣隊員調査報告書

一九九三年八月

1993年8月

国際協力事業団
青年海外

国際協力事業団

青年海外協力隊事務局

青 派 三
J R
93-04

105
36
JVI



国際協力事業団

25896

平成2年1月、時の海部総理大臣のハンガリー、ポーランド訪問の際にあった青年海外協力隊員の派遣についての言明が協力隊事業の東欧への展開スタートであった。この海部総理の言明を受け、同年4月中村前青年海外協力隊事務局長を団長とする事前調査団のハンガリー、ポーランドへの派遣を皮切りに複数の調査団が派遣され、要請背景調査等実務的な調査を行った。また、それぞれの関係機関と日本国外務省との間で派遣協定の締結交渉が行われた結果、ハンガリー国アンタル首相訪日の際、平成3年9月8日に東欧への協力隊員派遣第一号の派遣協定が締結された。このハンガリー政府との協定締結に続き、平成4年10月2日ポーランド、同10月13日ブルガリア政府との間にそれぞれ青年海外協力隊の派遣協定の締結が行われた。

今回のポーランド、ブルガリアへの短期緊急派遣隊員の派遣については、上記派遣協定に基づき、主として日本語教育・武道関係の職種において、一般隊員の派遣に先立ち、それぞれの国における現状、隊員活動に必要な情報の収集、問題点の把握及び詳細な要請背景調査を行うと共に、彼らの活動を通じて協力隊事業並びに協力隊員そのものを実際に理解してもらうことを目的として実施したものである。

本報告書は、ポーランド、ブルガリアへ派遣した短期緊急派遣隊員10名の半年間の調査結果をまとめたものである。この10名の短期緊急派遣隊員は、それぞれ一般隊員としての任務を全うしたOB・OGの中から特に選抜された優秀な隊員であり、彼らの精緻な調査結果は、今後派遣される隊員の活動をサポートするための貴重な資料となると共に、当事務局にとっても今後の派遣方針の策定並びに隊員の選考等業務上の有益な参考資料となることを確信している。

最後に、今回の短期緊急派遣隊員の派遣に際し、公私にわたり尽力頂いた在ポーランド及び在ブルガリア日本大使館の関係者の皆様に深い感謝の意を表したい。

平成5年9月14日

国際協力事業団
青年海外協力隊事務局
事務局長 青木 盛久

JICA LIBRARY



1111196101

ブルガリア・ポーランド
短期緊急派遣隊員リスト

(柔 道)

- | | | | |
|----------|---------|-------|---------|
| 1. 佐藤 一也 | 2 / 2 | ニジェール | (ブルガリア) |
| 2. 深沢 豊 | 2 / 2 | ポリヴィア | (ポーランド) |
| 3. 山本 竜正 | 6 2 / 2 | ケニア | (ブルガリア) |

(日本語教師)

- | | | | |
|-----------|-------|--------|---------|
| 1. 榎本 安吾 | 元 / 2 | ミクロネシア | (ブルガリア) |
| 2. 本田 弘之 | 元 / 1 | 中国 | (ポーランド) |
| 3. 内田 紀子 | 2 / 2 | マレーシア | (ブルガリア) |
| 4. 柏木 由美子 | 2 / 1 | マレーシア | (ポーランド) |
| 5. 戸島 真由美 | 2 / 1 | モルディブ | (ブルガリア) |

(合 気 道)

- | | | | |
|----------|---------|--------|---------|
| 1. 小林 弘明 | 2 / 1 | インドネシア | (ポーランド) |
| 2. 安藤 洋子 | 5 5 / 2 | マレーシア | (ポーランド) |

第1部 ブルガリア

はじめに		8 交通	
		9 住宅	
第1章 総論	7	10 治安	
1 ブルガリアの歴史		11 医療事情	
2 議会・政党		12 オフィスアワー	
3 経済		13 ショッピング	
4 国土		14 衣類	
5 人口		15 食	
6 公用語		16 物品価格	
7 民族		17 兵役	
8 宗教		18 ビザ／ブルーパスポート	
9 気候			
10 首都ソフィア		第3章 業務報告	77
11 地方都市		1 日本語教育	
12 首都ソフィアと地方の比較		(1) ソフィア大学	
13 国民性		(2) ソフィア第18高等学校	
14 現地の人々の生活		(3) ヴェリコ・タルノヴォ大学	
		2 柔道	
第2章 一般事情	45	第4章 付記	135
1 文化・習慣		1 ブルガリア内のボランティア団体	
2 時差		2 ブルガリア語	
3 祝日		3 要請のあがりそうな職種	
4 通貨		4 事務局への要望	
5 銀行及び両替		5 参考書	
6 通信		6 感想	
7 メディア			

はじめに

1993年2月15日より8月14日まで、私達は短期緊急派遣隊員としてブルガリアで活動しました。ブルガリアの情報を少しでも伝えたく、又、今後の隊員のために現地での活動をもとに報告書を作成しました。

日本語教師3名はソフィア大学、第18学校高等学校、ヴェリコ・タルノヴォ大学で、柔道2名は柔道連盟で活動し、現在榎本隊員（日本語教師）と山本隊員（柔道）は任期を延長中です。

この報告書を作成するにあたってはミーティングを重ね、経験したことや感じたことを伝えるべく努力をしましたが、半年の間にも報告書の内容の変更が必要になる程めまぐるしい変化の途中にある国なので、さらに半年後、1年後には様々なことが変化していることと思います。

ブルガリア語を勉強し、2年間活動する隊員達は、私達が見えなかった事が見え、気づかなかったことに気づくことと思います。今後派遣される隊員達がより新しい情報を得、より正しく、内容のある報告書を作り上げていってくれることを望みます。情報を積みあげることによって、活動がよりスムーズに、そしてより密度の濃いものとなっていくと確信しています。

最後に私達の活動を支えて下さった日本大使館、教育省、スポーツ省の方々に心からお礼を申し上げますと共に、ブルガリアの人々全てに感謝する気持ちをささげたいと思います。

第 1 章 総論

1 ブルガリアの歴史

現在のブルガリアの地に紀元前 8 世紀～5 世紀の間、最初の先住民族としてトラキア人が定住していたといわれている。紀元前 3 世紀にゲルト人が半世紀ほどブルガリアの地を支配するが、紀元前 4 世紀にマケドニアのフィリップ 2 世、その息子アレクサンダー大王親子が征服者として現れる。そして、ギリシャ、マケドニア、トラキアが互いに争う中、4 6 年にバルカン半島全土をローマ帝国が征服。しかし 4 1 0 年に帝国は東西に分裂。東部は東ローマ帝国（ビザンチン帝国）として存続する。

5 世紀末から 6 世紀にかけてバルカン半島には、スラブ人やゴート人が南下し定着、その後もアジア系ブルガール人（原ブルガリア人）が侵入し定着する。6 8 0 年にドナウ川流域のドブルージャ地方で、ブルガール人がビザンチン帝国軍を破り、6 8 1 年スラブ人と第一次ブルガリア王国を建設した。

第一次ブルガリア王国時代（6 8 1 年～1 0 1 8 年）

王国の首都はまずプレスカに置かれ、その後 8 9 3 年にプレスラフに移される。

第一次クレーム汗（在位 8 0 8～8 1 4）時代に、国家の領土は現在のルーマニア、アルバニア、北部ギリシャにまで及び、9 世紀には封建制度も固まった。この間、キリスト教（オーソドックス）の国教化、王制の開始、キリル文字の導入があった。それともう一つこの時期の歴史的出来事は、ボリス汗（在位 8 5 3 年～8 8 9 年）がローマ皇帝ニコラウス法王から贈られた王冠で自ら戴冠し、皇帝（ツァール）を称号したことである。聖帝シメオンの治世には、東欧における最も強大な国家となった。しかし後継者に恵まれなかった帝の死後国は急速に衰え、9 6 9 年にビザンチン、キエフの連合軍による攻撃を受けて東西に分裂。その間ベネチューグ族、第一次及び第四次十字軍の侵攻もあって第一次ブルガリア王国は荒廃するに至る。

第二次ブルガリア王国時代（1 1 8 7 年～1 3 9 3 年）

ベリコタルノボの貴族イバンとペーテルのアッセン兄弟がビザンチン帝国の圧政に対して反乱を起こし、1 1 8 7 年に第二次ブルガリア王国が誕生する。その時の首都はベリコタルノボである。

イバン・アッセン 2 世の時代にはいくつもの僧院が建てられたり、ブルガリア最初のコインが製造されたりする。アッセン 2 世の死後王国はまたも衰え始め、その頃強大な国家となっていたオスマントルコに 1 3 9 6 年征服される。

オスマントルコ占領時代（1 3 9 6 年～1 8 7 8 年）

1 5～1 7 世紀、トルコに対する反乱が各地で起こるが、すべて失敗に終わる。

1 7 世紀後半からハイドゥーティという集団が独立の為活動を開始。クリミア戦争でトルコが敗戦した後、これらの反乱は活発になる。この頃革命の必要性を説く指導者が現れ、1 8 7 6 年の「4 月蜂起」に発展していくが、この闘争もトルコ軍により取り押さえられた。1 8 7 7 年 4 月 2 0 日、ロシアがトルコに戦線布告。翌年 3 月 3 日にトルコは降伏し、ロシアによりブルガリアの独立がもたらされた。その年 7 月に召集されたベルリン会議でブルガリアは 3 分割されることになり、ブルガリア人の手に残ったのはソフィア地方を含

む北ブルガリアだけで、南ブルガリアの東ルーメリア地方はスルタン主権下の自治区、エーゲ海沿岸とマケドニア地方はトルコの属国となった。

ブルガリアの近代及び現代

1877年から1879年のロシアによる管理期間に新国家建設準備が行われ、ブルガリア国会からロシアの推薦するアレクサンドル・バッテンベルグ侯が王位につく。1886年には南北ブルガリアの統一も達成された。同侯辞任後の1887年にはオーストリア・ハンガリー帝国のフェルナンド・サックス・コブルク侯が王位に選出される。1908年フェルナンド侯はトルコの名目的宗主権を否定し完全独立を達成する。この時中世のブルガリア王にならい、自ら皇帝（ツァール）を宣言した。1912年に勃発した第1次バルカン戦争でブルガリアは領土を大幅に増やすが、1913年6月からの第2次バルカン戦争で第1次戦で得た以上のものを失う。1914年サラエボでのセルビア人によるオーストリア皇太子狙撃事件は第1次世界大戦に発展。ブルガリアはドイツ・トルコ軍に加わり戦うことになる。大戦末期フェルナンド侯が退位し、息子ボリス3世が即位する。1918年9月ブルガリアはついに降伏し、ヌイイー条約によりブルガリアの国土は縮小される。1939年第2次世界大戦勃発。最初ブルガリアは中立を決めていたが、ルーマニアからドブルージュ地方を奪回してからは枢軸側に加わる。（この時ソ連との関係は維持する）1946年9月8日の国民投票により王制を廃し、92.76%という得票率で共産党が支持され、9月15日にブルガリア人民共和国が成立。大戦の講話条約でブルガリアの国境は現在のものとなる。以降、共産党の指導下にて社会主義国家としての道を歩む。1989年11月、唯一親ソ的と言われていたブルガリアにも民主化の波は押し寄せ、33年間実権を握っていたトードル・ジフコフ政権は倒される。1990年6月には戦後初の自由選挙が実施され同年8月民主勢力同盟のジェリュ・ジェレフが大統領に就任。内閣は2次にわたるルカーノフ政権（社会党単独政権）を経て12月にはポポフ首相（無所属）を首班とする与野党連立政権が成立。1991年7月複数政党制、大統領直接選挙制、議会内閣制、個人の自由、私有財産制などを謳った新憲法が東欧ではアルバニアに次いで2番目に採択された。同年前年の自由選挙のやり直しを求めるデモが起き、再選挙が行われ、戦後初めて社会党が敗北し非共産主義政権が誕生した。

以上、年代は参考資料による（資料によって年代が多少違うことがある）。

ブルガリアで生活し、ブルガリアの国と人を理解するためにはこの国の歴史を知る必要がある。特に隣国トルコやロシアへの感情、現在の社会を知るためにも赴任前にブルガリア史を勉強することは大切である。

ブルガリアをトルコから解放した
ロシア皇帝アレクサンドル2世の像。



ロシア兵の像。
両脇にいるのはブルガリア人民。

2 議会・政党

<議会>

ブルガリアの国会は一院制を採用しており、定員は240名、任期は4年となっている。(大統領の任期は5年)。1991年10月の総選挙で民主勢力同盟が社会党(旧共産党)を押さえて第一党となり、戦後初の非共産政権が誕生した。尚、91年の総選挙直後の議席配分は次の通りである。

民主勢力同盟	110議席(46%)
社会党	106議席(44%)
権利と自由のための運動	24議席(10%)

<政党>

・民主勢力同盟(UDF)

1989年12月に結成され、1990年6月の戦後初の自由選挙において社会党に次ぐ第2党になり、翌年10月の総選挙で第一党になる。

党首はフィリップ・ディミトロフ議長。

・社会党(BSP)

1891年に社会党として結成され、1919年に共産党と改称し、1956年以降ジフコフ書記長による長期政権を維持した。1990年4月に党名を社会党に変更。

党首はジャン・ヴィデノフ議長。

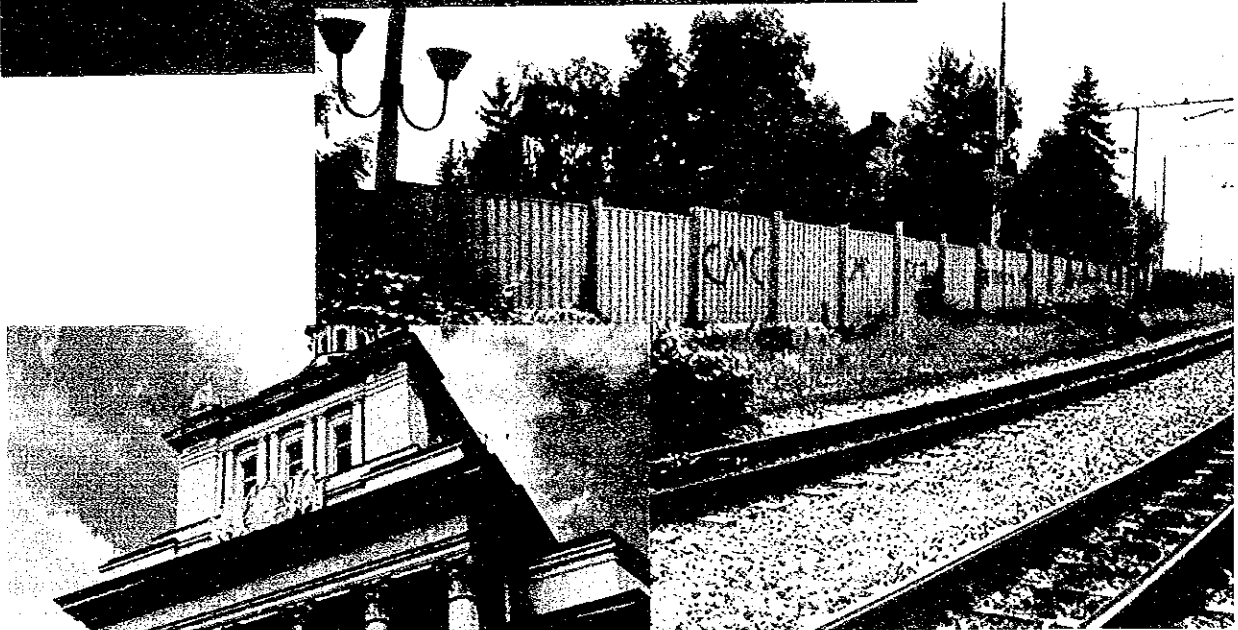
・権利と自由のための運動(MRF)

トルコ系住民の利益を代表する結社。党首はアフメド・ドガン議長。

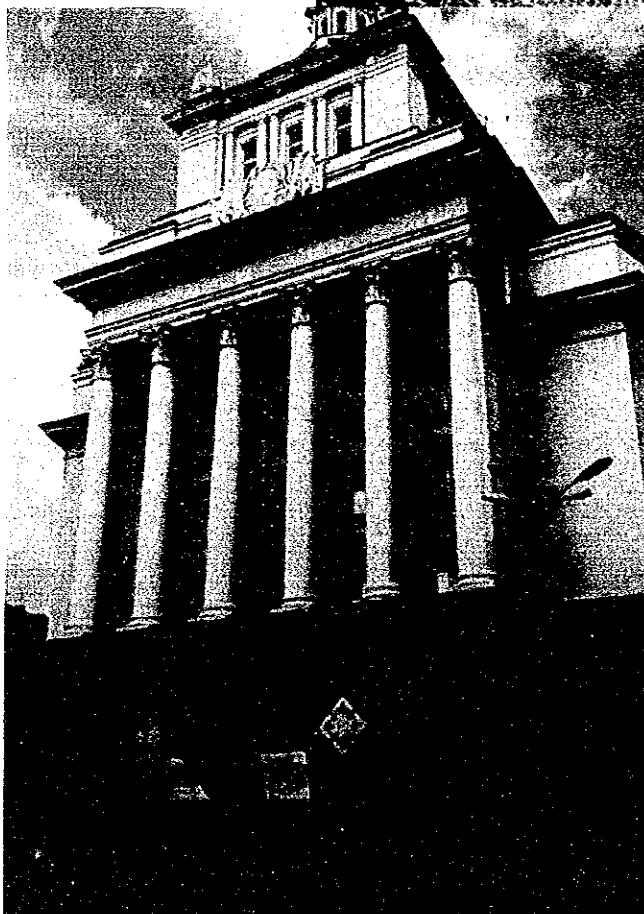




政党を指示する
プラカード (左)



落書きされた政党名 (下)



旧共産党本部
現在は映画館

3 経済

1989年以降民主化の大きな流れはブルガリアにも押し寄せ、1991年には市場経済導入に対し多くの動き（改革）が活発化する。同年2月には価格、金融、為替の自由化及び緊縮財政、高金利政策で経済の安定化を行う。しかしながら企業活動は低迷中である。

これまでの重工業偏重から農業、食品加工、軽工業、観光業の振興、交通、通信等のインフラの整備に重点を置き、輸出産業振興などの政策にも力を入れている。しかし経済情勢における問題は多々あり、旧体制からの対外債務120億ドルを始め、コメコン体制の崩壊、旧ソ連邦市場の喪失や湾岸戦争によるイラクからの輸出代金未回収、経済改革過渡期の混乱等、前途多難である。

主要経済指標、経済改革については“ブルガリア経済動向”参照。



新しい店が次々作られている。



ブルガリア経済動向

<p>主 要 経 済 指 標</p>	<p>①人口 ②GNP/NMP 一人当たり ③物価上昇率 ④工業生産伸び率 ⑤農業生産伸び率 ⑥為替レート (対USドル)</p>	<p>900万人 203億ドル(90年) 2,256ドル(90年) 508%(91年) (92年は80%前後の予想) -28%(91年) (92年は-20%前後) -25%(91年) (92年は-10%前後の見測) 2レバ 18レバ 26.5レバ (90年) (91年) (93年3月)</p>	<p>⑦対外債務 ⑧対日貿易(万ドル) 日本の対日輸出 日本の対日輸入 ⑨政府財政(1)~(3) (92年当初予算案) ⑩失業者(91年)</p>	<p>約120億ドル(92年) 89年 90年 91年 16428 5435 3562 4515 3461 4478 (1)財政支出 (2)財政収入 533億レバ 441億レバ (3)財政赤字 92億レバ 57万人(失業率15%)</p>
<p>経 済 改 革</p>	<p>①価格制度 ②金融・為替 ③民営化 ④銀行制度 ⑤貿易自由化 ⑥合併 ⑦国際機関加盟</p>	<p>91年2月自由化 91年2月自由化 国営企業の民営化採択(92年4月) (民営化庁発足、92年8月) 87年6月商業銀行7行設立 中央銀行設立 80以上設立された民間銀行の 統廃合実施中 輸出入ともライセンス管理 89年外資100%化 IMF(90年) ECとの連合協定に署名 (92年12月)</p>	<p>⑧外国投資保護法 ⑨不動産所有権の復活</p>	<p>(92年1月) 商店・倉庫等の旧所有者への 返還法(91年12月) ビル・大型住宅の旧所有者への 返還法(92年2月) 農地旧所有者への返還法 (92年2月)</p>

4 国土

バルカン半島の黒海側に位置し、南はトルコとギリシャ、西はユーゴスラビア、北はドナウ河を境にしてルーマニアと国境を接する。面積は約11万km²（日本の約3分の1）。首都ソフィアの緯度は札幌とほぼ同じである。地勢は変化に富み、国土の約41%は海拔200～600mの台地、27.6%は海拔600m以上の山地、残る31.4%が海拔200m以下の平野である。

5 人口

約900万人。（1991年）

約90%がブルガリア人。その他トルコ系が10%、ジプシー系少数。
因みに近年、約100万人が海外に流出していると言われている。

主要都市人口：ソフィア	122万人
プロブディフ	38万人
ヴァルナ	31万人
ブルガス	20万人（1991年）

人口密度：1平方キロメートルあたり81人

出生率：11.7人	} 人口1000人に対して（1990年）
死亡率：12.1人	
増加率：0.4人	

6 公用語

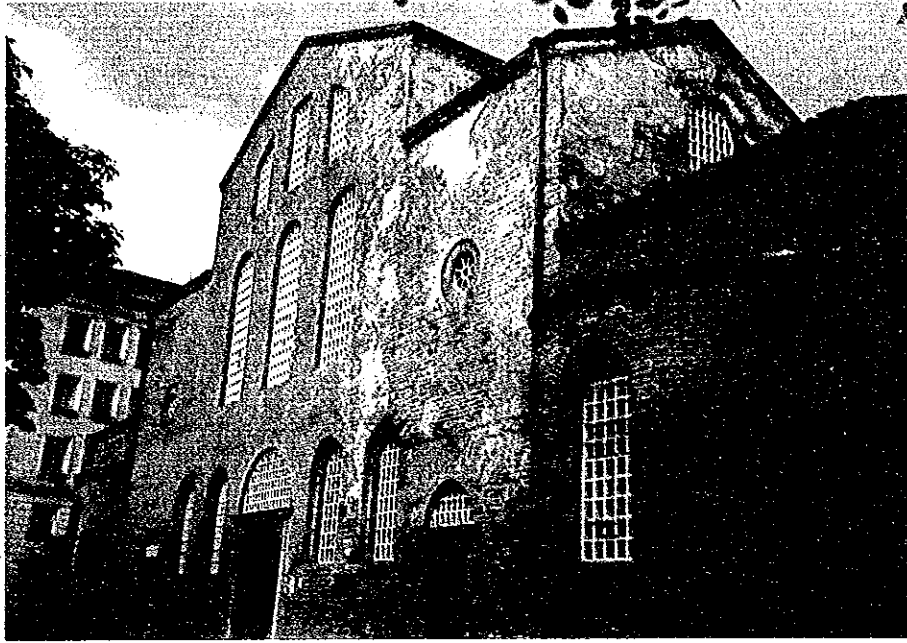
公用語はスラブ系のブルガリア語。同じくスラブ系のロシア語とよく似ており、同様にキリル文字を使用。通じる外国語はロシア語、ドイツ語、フランス語、英語の順である。但し、一般的にはブルガリア語しか使われていない。若い人の中では英語を解する者が増えているが、一般市民への普及度はまだ低い。英語のメニューを置いていないレストランも多い。

7 民族

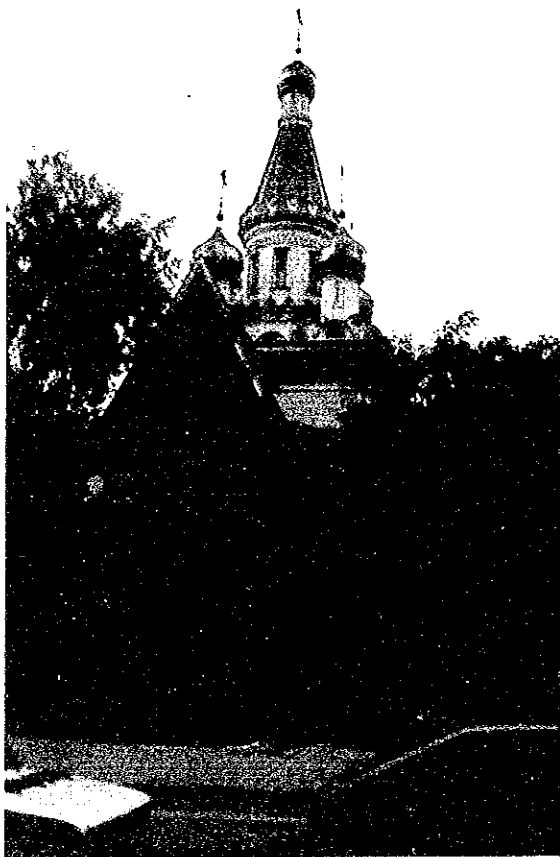
人口の大半はスラブ系ブルガリア人である。その他の少数民族としてトルコ人、（約100万人）、ジプシー、また極少数ながらアルメニア人、ロシア人、ギリシャ人、ユダヤ人、タタール人、ルーマニア人等がいる。こうした少数民族との間には根強い人種問題もあるようだ。また近隣諸国からの不法侵入者も更に増えているようである。

8 宗教

人口の80%がギリシア正教の流れを汲むブルガリア正教に属している。また、トルコ人はイスラム教を信仰している。その他ローマ・カトリックやプロテスタントの信仰も若干見られる。



聖ソフィア協会



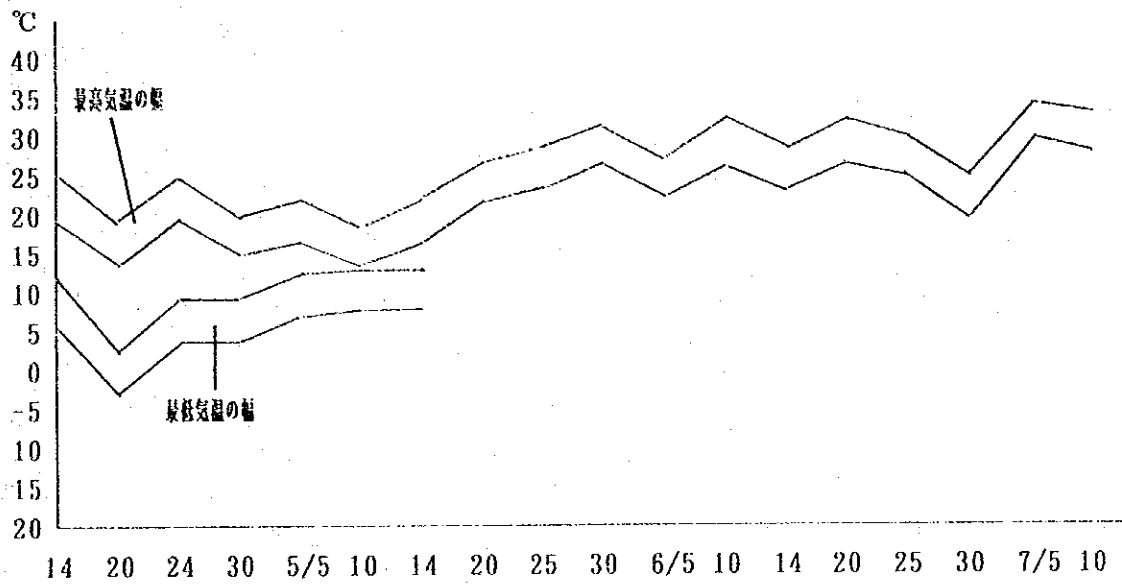
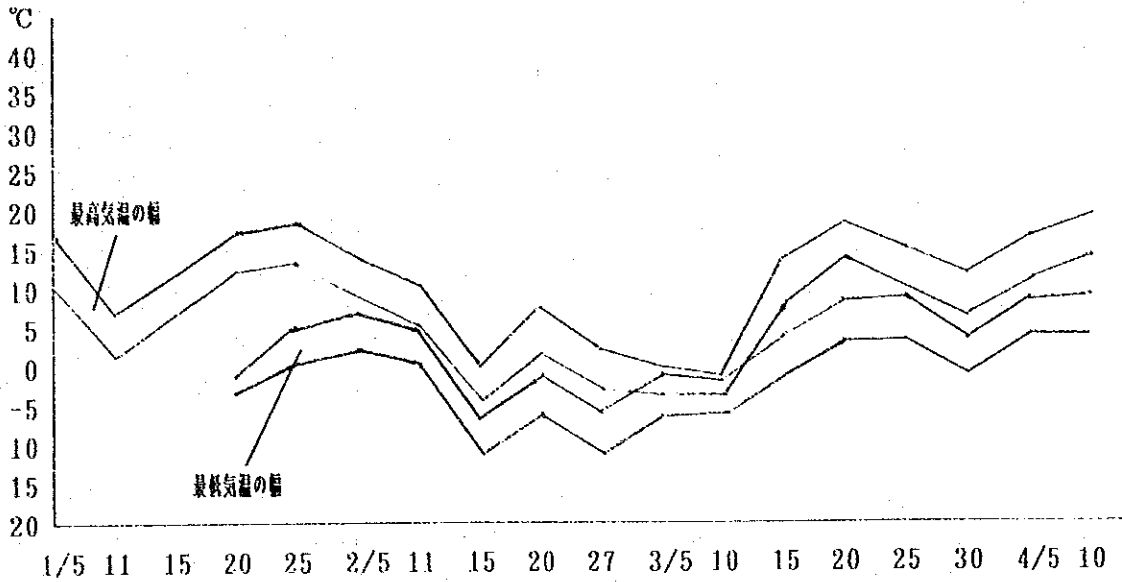
セント・ニコラス教会



アレクサンドル・ネフスキー教会

9 気候

ブルガリア国内 1993年1月～7月初旬



・各月の最高気温と最低気温（地名不明）

	最高	最低
1月	1 2	- 1 1
2月	1 6	- 1 2
3月	2 7	- 9
4月	2 5	- 3
5月	3 4	
6月	3 5	

*ブルガリアは地域によって気温が大きく異なり、朝と晩でも気温差が激しい。天候も変わりやすく、真夏にコートやセーターを着る程寒くなることもあるので油断は出来ない。

1 0 首都ソフィア

1) ソフィア市のプロフィール

首都ソフィアは人口120万人でブルガリアの政治、経済、文化の中心である。

市の北にはバルカン山脈、南にビトーシャ山がそびえていてソフィア市自体も標高2000メートルの高原都市である。水はビトーシャ山を水源とするストルーマ川から供給されていて、ソフィアの水は美味しいことで評判である。街は約5000年の歴史を持ち、ヨーロッパにおけるもっとも古くから発達した都市の一つである。紀元前5～4世紀、古代トラキア人によってこの街は建設された。ローマ時代にはセルディカと呼ばれ、3世紀には独自の通貨を使用した自由都市となった。現在のソフィアの名は14世紀につけられたもので、6世紀に建てられたこの街の最も古い教会の一つである「セント・ソフィア教会」に因んでいる。

2) ソフィア市の印象

真冬に到着したせいか最初の印象は暗く、閉ざされたような感じを受けたが、気候が良くなるにつれて街全体の色彩が明るくなり、人々の服装も開放的になってきた。

2月頃は気温はマイナス8℃という日もあり、「寒い」というより「冷たい」という感覚だった。しかしホテル内は集中暖房の為暑く、窓を開けて温度調整をするほどであった。

ソフィア市内は小さな路地がいくつも入り組んでおり、散歩をしていると毎日どこかで新しい店がオープンしているのに出会う。雑然とした雰囲気の中にも少しずつではあるが街に活気が見られるようになって来た。

市内には公園も多数あり、現地の人々の憩いの場になっている。チェスなどのゲームに興じている人々や絵を描いている人、ベンチに座って談話をしている人々の姿を見かけることができる。この人々は4月頃まではきそって日向に陣取り、日ざしが強くなって来た5月過ぎは日陰に陣取るようになる。

ブルガリア人は犬好きで、犬を連れて歩いている人が多い。この犬たちもおとなしく、社会の一員といった感じである。犬に対する躰はかなり厳しい。

ジプシー系の人々か、物乞いをする人々を市内でよく見かける。

露店の花屋が多く、決して生活は楽ではないのだろうに、1本、2本と花を買って帰る人の姿を多く見かける。

他人には干渉しないようで、一目で外国人と分かる我々に対しても都会人らしく無関心を装う人が多い。しかし同アジア人でもベトナム人に対する感情は頗る悪く、ベトナム人に間違われてからまれた日本人もいる。また街中や乗り物の内で、一目をはばからずに抱き合ったりキスしたり、中には濃厚なペッチングをしているカップルもいる。

乗り物内では必ず老人に席を譲り、切符の打刻を気軽に助け合い、乳母車をバスなどに乗せる時は必ず周りの人が手助けするなど、日本人が見習わなければならないような場面によく出会う。

店員のサービスは社会主義の体質を引きずっているのが期待出来ないことが多いが、決して不親切なわけではない。英語は殆ど通じない。

歩きながらバナナ、パン、ナッツ類、ひまわりの種などを食べる人がとても多い。

若者の間ではハードロック、ヘビーメタルが流行っている。衛星放送でMTVが見られ、ラジオのVOAで「ALL AMERICAN TOP40」が聞けるので、最新音楽には敏感なようである。ディスコが多く、中学生程度の年齢でも出入り自由なようである。風俗関係の店もあり、

「NO AIDS HERE」の看板を出している店があった。レーザーカラオケが置いてあるカフェバーもある。夜はネオンが少なくて暗く、電車やバス内も薄暗い。

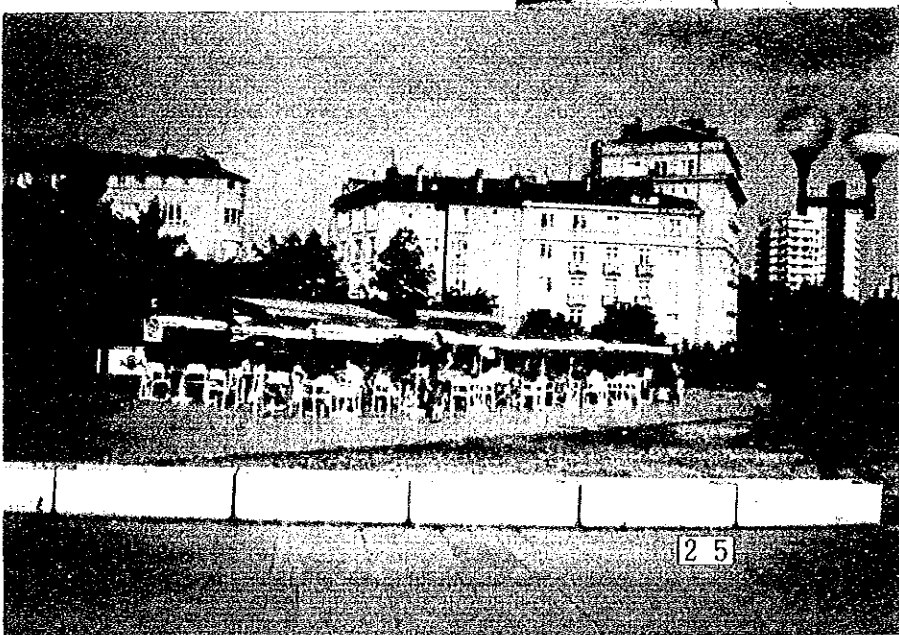
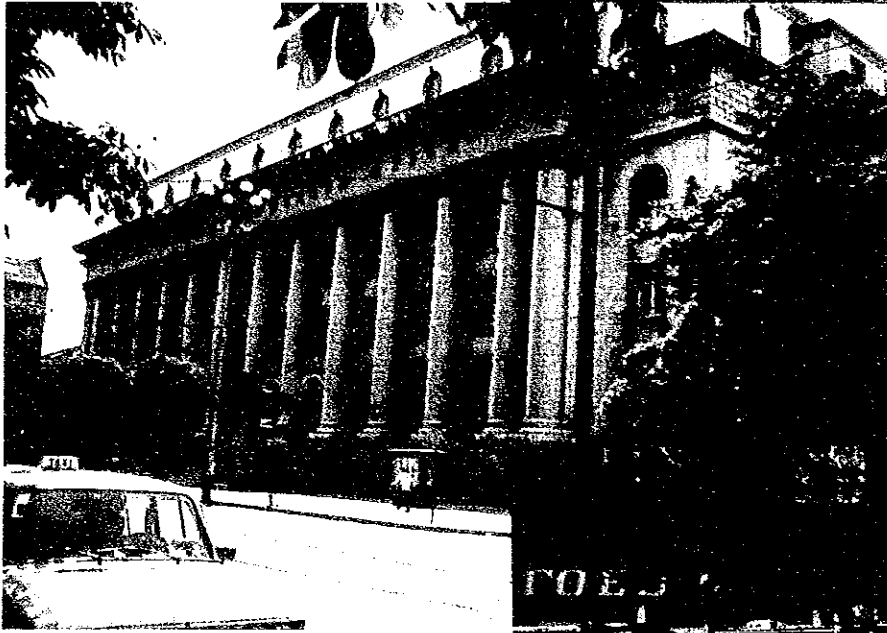
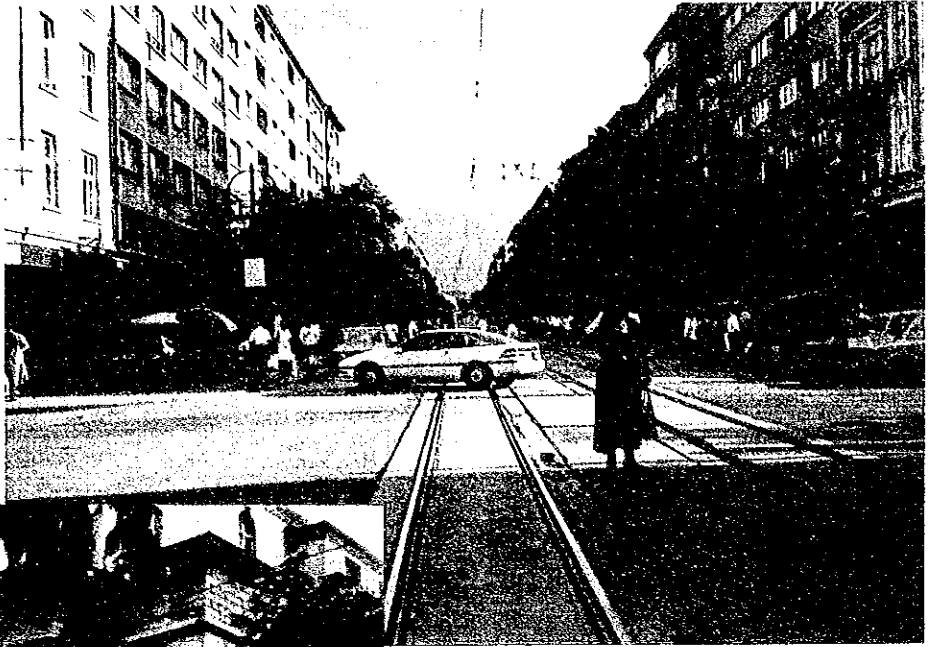
市内の新しい店はペンキを塗ってきれいだが、建物自体は古く、壁の剥げかかったものも多い。道は石畳が多く、穴、でこぼこ、水たまりが多く、その上路上駐車している車が多いので歩きづらい。



露店が沢山出ている。



犬を連れて散歩している人が多い。



ソフィアの街の様子

1 1 地方都市

ヴェリコ・タルノヴォ

ソフィアより東へ240 km、人口8万人の小さな街である。ブルガリア最大の山脈バルカン山脈の東部にあり、四方を山に囲まれ街の東側をドナウ河の支流であるヤントラ川が流れている。

第2次ブルガリア王国時代(1187~1393)には約200年にわたり首都だったところで、日本で言えば京都にあたることである。それゆえ古い建物も多く、丘の斜面に建ち並ぶ家々がかもし出す雰囲気は独特のもので、その美しい風景を守るために町並み保存に関する条例もある。

街の主産業は観光とテレビの製造である。

街は新市街(西部)と旧市街(東部)とに分けられ、旧市街の先には第2次ブルガリア王国時代の宮殿と総大司教区の跡があり、城壁や教会が復元されている。

街の機能を果たす役所、銀行、郵便局(電話局)、商店などは新市街の中心部に集まっており、旧市街には伝統工芸の工房などがある。また新市街の西側には近代的な新興住宅地が開けており、ジプシーがかたまって暮らしている地域もある。

市内の住宅はソフィア同様、一戸建て住宅は少なくほとんどが3階建から10階建のアパートであり、地下は冬に備えての保存食の保存室になっている。アパートは国が建設したものと民間企業が建設したものがあり、後者のものは建設前に入居者を募る買い取り式のもので、入居者はローンで返済することになっている。このアパートは日本の住宅事情を考慮すればちょっとしたマンションと呼べるほどのものであり、地下室のほかに屋上部屋(小さな部屋一つとトイレ)もある。

この新興住宅地の住宅にはソフィアの住宅同様、集中暖房の設備もあるが(6月から9月まで節電のためストップ)、他の地区の住宅は20リットルの電気温水タンク(湯を沸かすのに6時間かかる)で、シャワー、炊事を賄うのであるが、15分間のシャワーでタンクの湯はなくなるので冬季には温水を節約しながらのシャワーとなる。また室内の暖房も電気ストーブに頼ることになるが、集中暖房と較べれば惜げなくなるほどの暖房力である。またアパートによっては使用電力の容量に限りがあるので、電気ストーブ、温水タンク、調理用コンロを同時に使用すると電気系統に重大な問題を引き起こすことになる。概してヴェリコ・タルノヴォの冬はソフィアよりも厳しいが、集中暖房が行き届いてない故室内での生活も相当なものである。

暖房の問題に加え、夏季には水不足の心配もあり、時々断水になる。なお停電はごくまれである。

住宅地にはソフィアにあるような一カ所で何でもそろえることのできるスーパーマーケットはなく、アパートの一階にあるガレージを改築した小さな店がそこそこにあるだけである。それ故人々は街の中心部まで出かけ小さな店をいくつも渡り歩かねばならない。店にはソフィアと較べ品物も種類、量ともに少なく、値段も安くはない。また専門化が遅れ、衣類、文具、おもちゃなどを同時に扱っている店も多い。特に国営の店では7月に冬用のセーターをショーウィンドーに飾ったままにしているなど、自由経済への対応に遅れている。ソフィアのように目まぐるしくはないが、2月から7月までの間にコンピューター・ショップ(2店)、自動車販売店(2店)など新たに開店する店も多く、自由経済化の影響を目の当りにする。

人々の生活はソフィアと較べると幾分のんびりしているようである。平日の楽しみは友人、知人とカフェで語り合ったり、映画を見たりという平凡なものである。休日には近郊の村にある畑に行き、家庭の食卓に上る野菜やくだものの栽培をしている家庭も多い。またハイキングや釣りに出かける人も多い。最近ではスロット・マシンなどを使ったギャン

ブル性の強い遊びが中年男性を中心に人気がある。ソフィアとの人口格差は甚だしいが、人々の暮らし振りは似ている。

ブラゴフグラッド

ソフィアから100 kmほど南にあるピリン地区の中心地。

観光としてはあまり見る所はないが、大学、病院、銀行、旅行案内所が揃っている。

アメリカン大学があり、近代的な立派な校舎で中の雰囲気も明るい。商店街は首都ソフィアよりも整然としている。

サンダンスキ

昔から温泉の町として栄え、温泉療養の町として知られている。

ブルガリア各地、外国からも観光客が訪れている。メディカルスタッフのいる療養センター付きのホテルもある。

温泉といっても日本のそれとは違って、温水（泉）プールに水着で入る。

国内で最も気候が温暖で、ブルガリア人が住みたい町の上位にあげられているようだ。ソフィアがまだ寒い頃でもサンダンスキにはもう春が訪れ、ポカポカといい天気、花も咲き乱れていた。町は一本のメインストリートの両側に店が並ぶ程度の小さなものだが、こじんまりとしていてなるほど住みやすそうな印象をうける。

サンダンスキの地名はマケドニア革命の闘志の名前からとられている。その昔は「聖なる医者」という意味の「Sveti Vrach」と呼ばれていたようだ。この町は剣奴スパルタクスの生地であり、彼の像が国道沿いに建っている。

メルニック

サンダンスキより20 kmほど南にある小さな町、というより村。ユーゴスラビアとギリシャとに国境を接し、石灰石の侵食でできた岩々に囲まれるようにしてある。赤ワインの産地として有名である。山の中にある陽だまりの村、という印象が強い。

オスマントルコ時代の名残りの防壁や、18世紀のワイン商人の家などを見ることができる。

リラの僧院

ソフィアの南約130 km、リラ山地の奥深くにある静かな僧院。

9世紀から10世紀にかけてこの地で宗教活動を行っていたイヴァン・リルスキーという聖者が建てた寺院が始まり。

14世紀以降のトルコ支配下で多くのキリスト教会が弾圧を受けモスクとされる中で、人里離れたこの僧院だけが信仰を守り通すことができた。しかし僧院は19世紀に火災に遭い、大部分が再建されたものである。

教会内部にはこの僧院で修業した僧たちの骨が埋め込んである「奇跡のイコン」というのが展示してある。これに触れると奇跡が起こり病気が治ると言われているが、ガラスケースに入っているため直接触れることはできない。また、祭壇の上には聖者の目を表す大きな目がある。教会内部や外壁は色とりどりの壁画やイコンで飾られていて美しい。

プロブディフ

ブルガリア第2の都市プロブディフはソフィアの東南約150 kmにある。

街は旧市街と新市街に分かれており、旧市街はトリモンティウムと呼ばれる丘の上に広がる。ローマ時代の円形劇場や城壁ヒサル門があり、古い家並は歴史的保護建造物とされている。

トルコ人の豪商の家を利用した民俗博物館や考古学博物館があり、昔の生活を垣間見ることが出来る。その他に聖マリーナ教会、聖コンスタンチヌ教会、エレナ教会といった美しい教会がある。

新市街の中心は中央広場で、広場の中央にはローマ公開競技場跡がある。その周囲にはアイコンや絵葉書、油絵等売る露店が並び、バシルコラロフ通りには映画館、洋服店、ミュージックテープ店などが続き、多くの人で賑わっている。

プロブディフは商工業及び農業の中心地で、多くの工場があり、毎年5月と9月に国際見本市が開かれる。

バルナ(黒海沿岸地方)

黒海沿岸地方はブルガリアきっての観光地である。国内のその他の地域と異なり、5月から10月のシーズンには明るく開放的な雰囲気溢れる。しかし隊員が訪れた4月上旬はまだまだ寒く、ゴールドンビーチ沿いに建ち並ぶ宿泊施設はどこも営業されていなかった。沿岸地方の中心地であるバルナも閑散としており、この地域を訪れるのはシーズンを狙った方が良い。

バルナは人口31万人のブルガリアの第3の都市であり、造船所や電気器具などの多くの工場がある。

ローマ浴場跡、海軍博物館、水族館等の他に民俗博物館がある。バルナの地域の人々は長い間農業を営んで生活しており、民俗博物館ではその時代ごとの農機具や川魚釣り用の道具が見られる。農耕民族らしい豊作を願う習慣(刈り入れ最後の穂ににんにくと硬貨を赤い糸で結ぶ)や、新年用あるいはクリスマス用の飾り等が見られて面白い。ブルガリアの伝統的なワイン作りの過程、美しい織物とそれを織る機械、19世紀~20世紀のこの地域の人々の衣装も見られ、当時の寝室、居間、台所が再現してある。

バラの谷

ブルガリアはヨーグルト以上にバラで有名であり、ヨーロッパで生産される香水の70~80%はブルガリア産のバラの香油を使用していると言われている。

バラの谷と呼ばれるのはソフィアから東へおよそ130 kmほどのところに東西に細長く伸びている盆地。主な街にはロシツ、ソポト、カルロポ、カロフェル、カザンルック等がある。カザンルックにはバラ試験場や博物館もあり、規模は大変小さいが、様々な種類のバラや香油を取る過程を知ることが出来る。

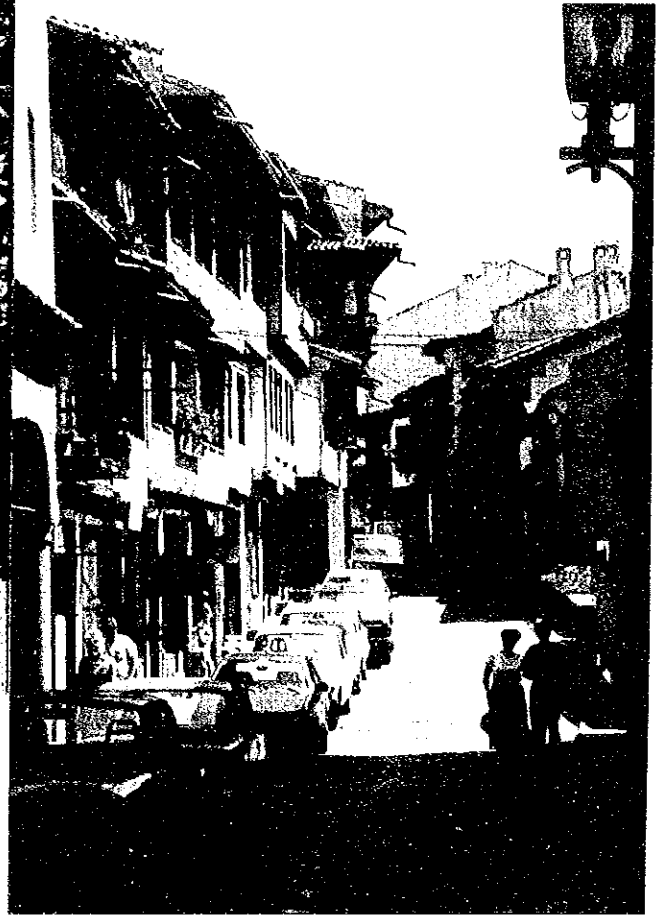
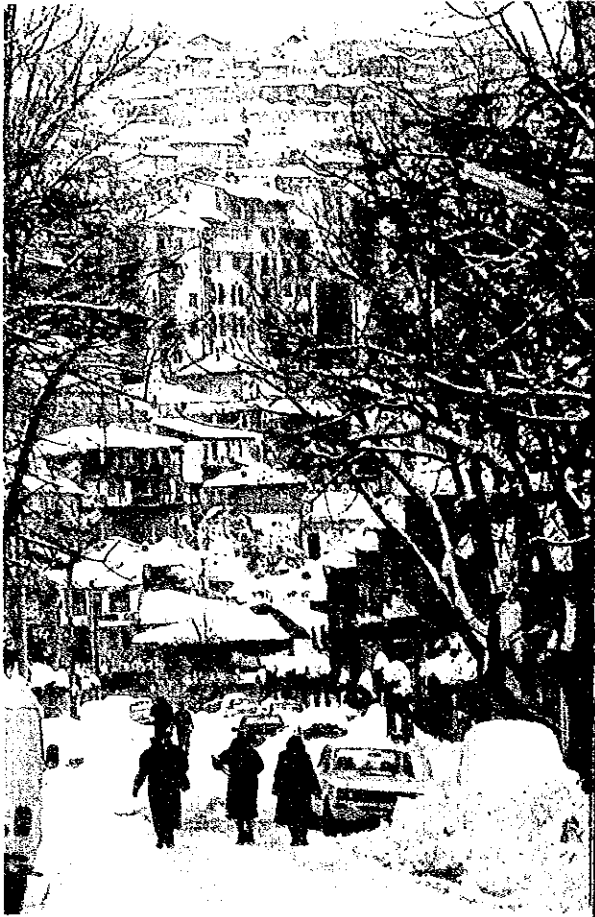
5月末から6月初めのシーズンになるとバラが咲き乱れ、芳しい香りを放っている。

6月の第1日曜日頃に伝統的なバラ祭りが催され、民族衣装に身を包んだ女性達がバラを摘む姿や、歌や踊りを披露する姿が見られる。

カザンルック

「バラの祭り」で有名な所。1年に1回の祭りだがバラの咲く時期に左右されるので「祭りの日」は咲く前後にならないとわからない。今年は6月6日。

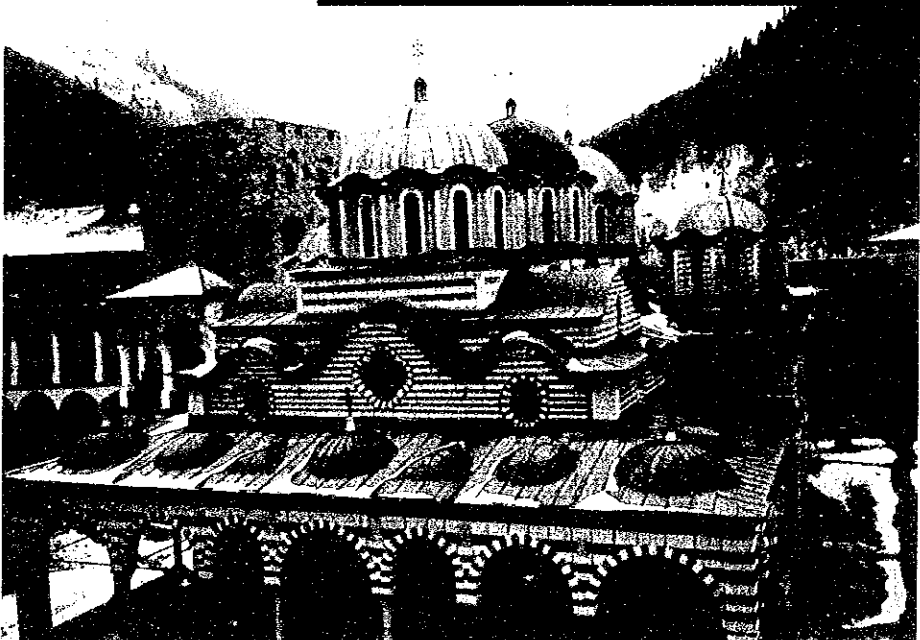
祭り当日は朝から会場まで踊ったり、歌ったり、しゃべったりしながらパレードをする。馬車でパレードに参加する観光客もいる。そして会場では踊りが披露され、その年のローズクィーンが現れたり、俳優達がパフォーマンスをしながら現れたりする。



地方の様子
ヴェリコ・タルノヴォ



バルナ

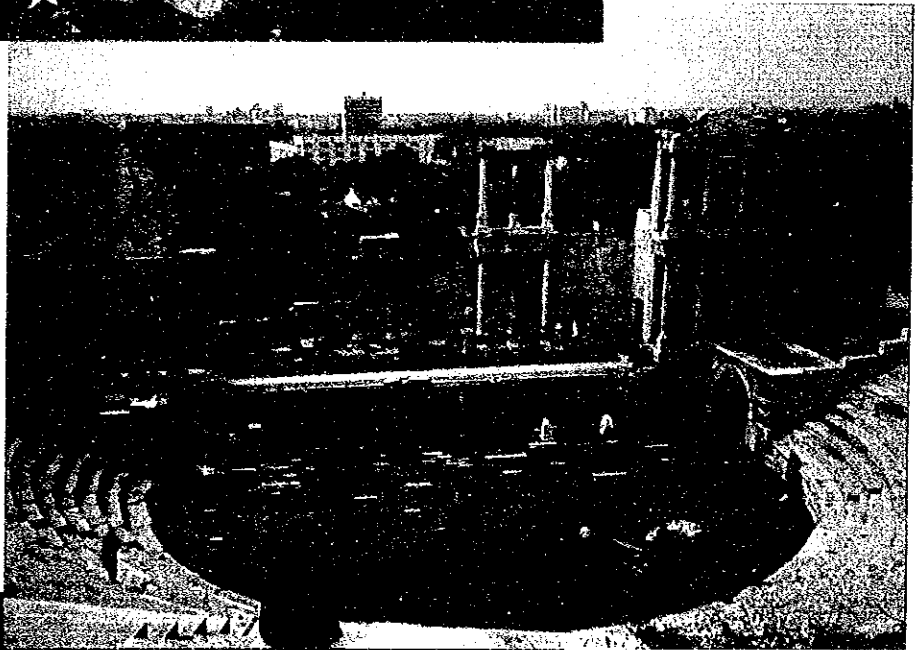


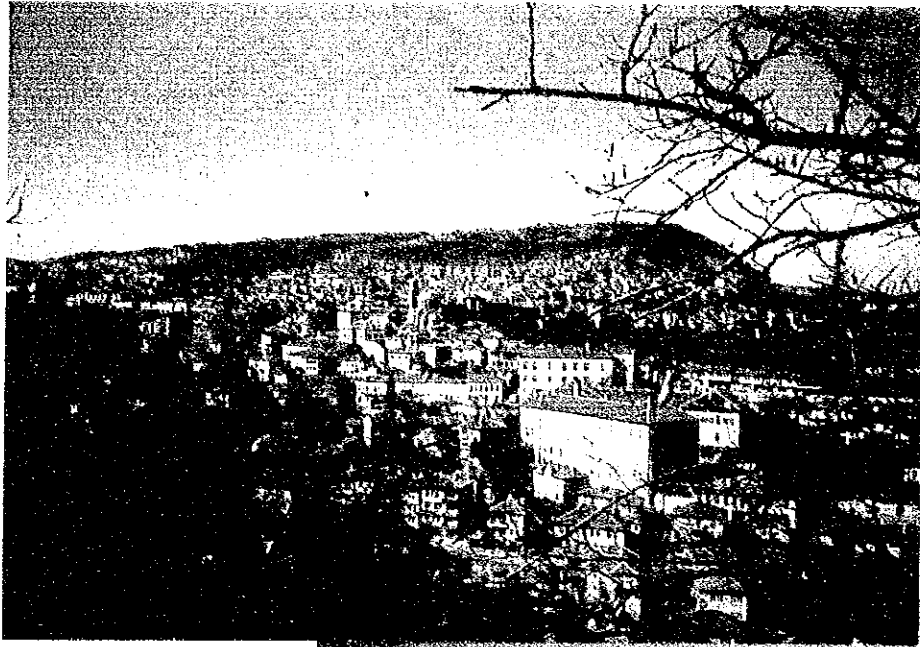
リラの僧院



バチコボ僧院

プロブディフ





バラの祭り



メルニク

1 2 首都ソフィアと地方の比較

ソフィア市内は人や車が多く、ごちゃごちゃとした雑多な街である。互いにあまり干渉せず、他人は他人といった印象を受ける。時たま外国人を不躰に見ることはあるが、大抵は気になってもあからさまには見ないという都会人特有の反応がある。

ここ数年で車が一気に増え、交通渋滞・事故が問題になっている。新しい店が次々と開店し、西側の商品が多く出回るようになったが、そのため益々物欲に拍車が掛かり、盗難等の犯罪は増える一方である。

電化製品は完全に生活必需品で、テレビ、ラジオ、ビデオデッキの普及率が高い。

ソフィアを離れると農業国らしい牧歌的な風景が続き、人々もその風景の一つのようである。羊や牛の群れが現れ、ソフィア市とは異なるブルガリアの顔を見ることが出来る。地方ではソフィアと比べると商品の普及度はかなり落ち、選択する余地はない。服装も概して地味である。物価は際立って差があるとは思えない。地方では、ソフィアのように一カ所で何でも揃うようなショッピングセンターはなく、小さな店を逐一チェックしなければならない。また店は余り専門化されているとは言えず、テレビから下着、子供の玩具など一括して扱っている店が多い。メディアも少なく、ラジオは国営放送のみで英語放送はない。

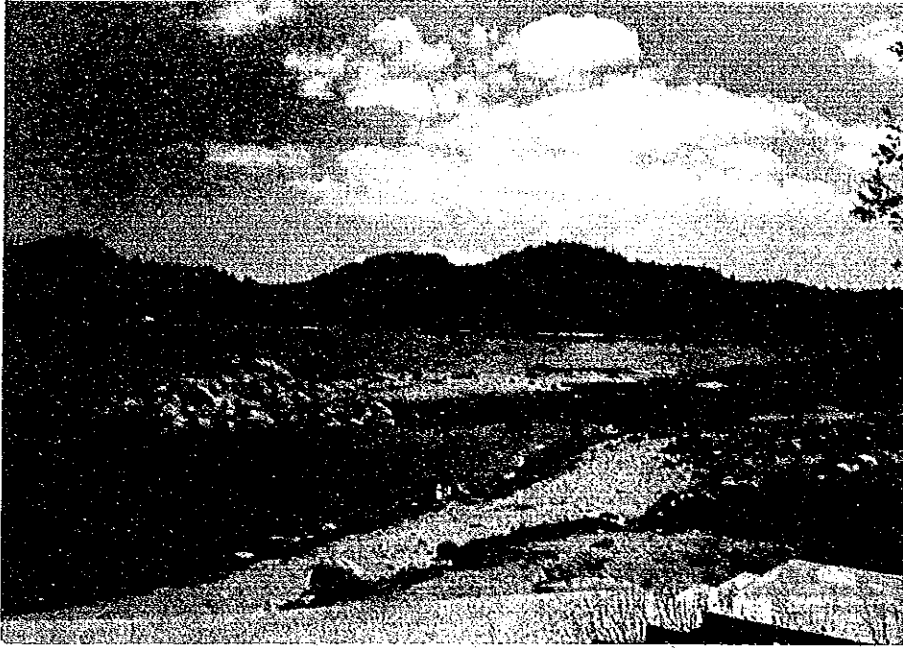
住宅に関しては、ヴェリコタルノヴォのような地方都市でも振興住宅以外には集中暖房はないので、冬期は相当数の暖房機具を用意しないと快適な生活は望めない。



首都ソフィア
高層住宅が多い



街中



地方
ブルガリアは自然が豊かな国

ソフィア郊外



1 3 国民性

全体的に「笑顔」は売り物にしていけない感がある。そうかといって不親切な人達かというとなんな事はなく、物を尋ねると言葉が分からなくても実に親切に教えてくれる。だがブルガリア人に言わせると、ブルガリア人同士はさほど親切ではないと言うので、我々が外国人であるが故に親切を受けているのか実のところは分からない。

年長者は労られるのが当然と考えているようで、よく乗り物の中で席を譲らせている。

動物や花を愛する人達であるようで、アパートでも大きな犬を飼っている家が多く、実によく可愛がっている。また、花は決して安値ではないのに、花を買って帰る人々をよく見かけるのは心が和む。

つい最近まで徹底した共産主義であったためか、先のことを考えて物事をアレンジするとか、まとまってグループで作業をするということに慣れておらず、1人1人の能力が高いにもかかわらずそれを全体に活かさないという印象を受ける。全体的に勤勉、真面目、質素な人々であるが、融通がきかないという面もある。

1 4 現地の人々の生活

月収が1人平均約US\$100であり、家族で働いたり、アルバイトをしたりして凌いでいる。学生の中には食事代を削って本を買い、勉強している者もいる。昼食をバナナ1本、パン1つで済ませている人も多い。

最近老人の自殺が増えているようで、民主化は一段落したものの、世情は不安定のままである。昨年冬は停電が多く、2時間おき、3時間おきに停電していたらしい。

冬場は野菜も少なく、卵も並んで買っていたという。飴もなかなか手に入らなかった。しかし、今はどんどん新しい店ができ、パン、肉、果物とほとんど何でも手に入る。値段が10倍、100倍になった物もあり、激しい物価高に対して以前のほうが（共産党政権時代）良かったと言う人も少なくない。

つい最近まで実に徹底した共産主義で、殆どが党员だったという。秘密警察が活動していたのもつい3年前のことだ。質素で辛抱強い国民だが、保守的でプライドが高い。

土曜日の午後と日曜日には多くの商店が閉まってしまうので、人々はお茶を飲んだり、友人宅へ出かけるなどして休みの日を過ごしている。

日本企業はジェットロ、住友、三菱などがあり、ブルガリアに滞在している日本人は、日本人会に所属している人が約70名いる。日本人学校はない。



物を大切に使う。
ストッキングを
つくろう店もある。

第2章 一般事情

1 文化・習慣

日本での「はい」「いいえ」の首の振り方と全く逆になるので注意が必要である。こちらが返事をする時は「YES」か「NO」か口に出して言うこと。

飲み物は一度にコーヒー、ソフトドリンク、酒類の中から数品を注文し、飲むことが多い。

家族に死亡者が出た場合、その人の黒枠の写真と十字架を印刷したビラが自宅のドアや電信柱、近所に貼られる。自宅のドアには写真の他に黒い大きなリボンを飾る所もある。親族の中に不幸がでると、洋服に黒いリボンをつける。特に地方の方では身内に不幸がでると、女性（年配の）はそれから黒いスカーフをかぶって生活するという習慣も多く残っている。死んでから9日目、40日目に墓参りをする。

チップは今までは習慣としてなかったが、ホテルでの枕チップは10レバ、荷物運びを頼んだ時に荷物1つにつき10レバぐらい、レストランなどでは端数を切り上げて渡したりする。

プレゼントを交換したり、金銭を渡す習慣はあまり無い。結婚式や葬式にも金銭は包まない。葬式の時には家族が、結婚式や誕生日には本人が友人や知人にチョコレートやキャンディーを配る。

子供が重い病気の時、あるいは伝染性の病気に掛かった時には他の人が立ち寄らないように家のドアに赤いリボンをつける。

マルタニツァという行事が3月にある。3月1日より年齢、性別を問わず一斉に赤と白の糸でできた御守りのような飾りを身に付けて健康と幸福を願う。こうのとりに見たら木の枝に下げるといふ人もあり、石の下に置くといふ人もいる。赤は健康、白は力を表すといふ説や赤は春、白は冬を表すといふ説もあるが、どちらにしる春の訪れを祝う行事の1つと思われる。

こうのとりは幸福のシンボルで、この鳥が屋根に巣を作るとその家の人は幸せになると言われている。ブルガリアには毎年こうのとりが訪れる村が幾つかあるが、それらのこうのとりは毎年3月1日にやって来て、8月20日に一斉にアフリカに飛び立つと、何故か日にちが決まっている。

花を贈る時に偶数は良くないとされている（墓参りの時に偶数の花を添えるので）。また、黄色い花も好ましくないとされている。

石鹼、金の手渡しは友人関係が壊れると言われ、テーブルの角に座ると結婚出来ないと言われている。

オペラ・コンサート・演劇は盛んで、安い料金で毎日のようにどこかで催されている。映画も安い（6～10レバ）。全席指定で入れ替え制。

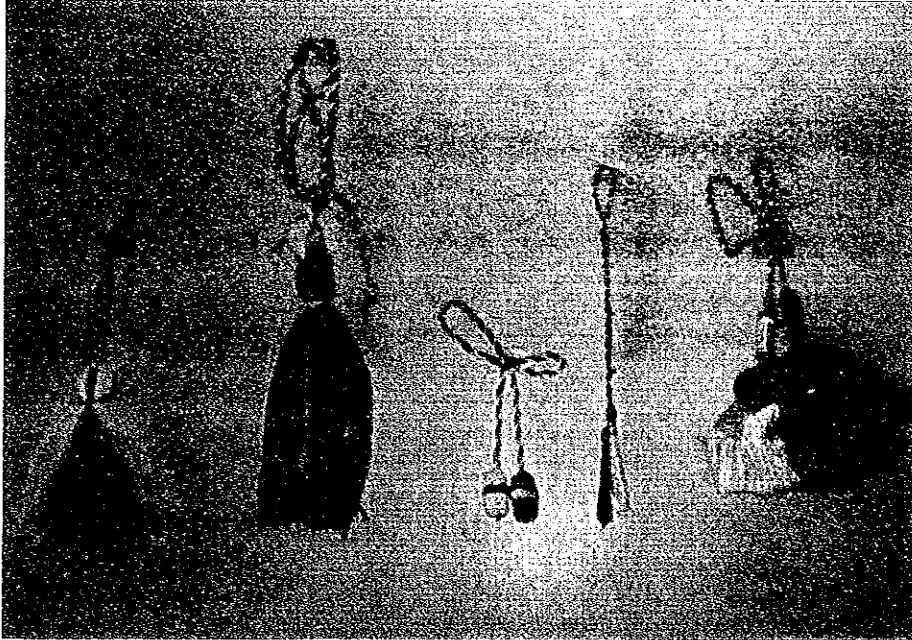
手工芸品はレース編み、刺繍、ボビンレース、区限刺繍、織物、陶器、木彫りとあり、特に刺繍、レースものには細かくて手の込んだものがある。手工芸品は土産物店やデパートに売っているが、近郊に住んでいる人達が自分で作り露天に並べている姿も見かける。

銀細工も有名で、線の細いデザインのアクセサリや小物入れがある。

絵画もよく売られている。イコン画という宗教画も多い。ブルガリア正教ではこのイコン画を各家庭に飾り、ろうそくをともし祈りを捧げるそうである。

ブルガリアはヨーグルト以上に薔薇が有名で、ヨーロッパで香水等に使われる香油の70%を産出している。薔薇のジャムやポプリを作る家庭も多い。バラのブランディというものもある。

音楽では「ブルガリアンポリフォニー」が有名である。楽器ではガイーダという独特の物があり（羊や山羊の皮袋でできたバグパイプ）、街角で演奏している姿も時々みかける。音楽や踊りはトルコの影響が濃く、大変よく似ている。



マルタニツァ
色々なデザインがある。

木に結ばれた
マルタニツァ



2 時差

日本より7時間遅れ。但し、3月最終日曜日から9月最終日曜日までは夏時間が用いられ、6時間遅れとなる。

3 祝日

1月1日	新年
3月3日	ナショナルデー
4月18、19日	イースター(1993年)
5月1日	メーデー
5月24日	文化の日
12月25日	クリスマス

以上の他に休日にはならないが、女性の日、子供の日、名前の日、警察の日、大学生の日等の記念日がある。

4 通貨

通貨の単位はレフで、複数はレヴァという。1レフは100ストチンキ。紙幣は1、2、5、20、50、100、200レヴァの8種類。硬貨は1、2、3、10、20、50ストチンキの6種類がある。尚、20レヴァと50レヴァは新札が発行されているので新旧2種類の紙幣が出回っている。

5 銀行及び両替

国営銀行の他、いくつかのプライベートバンクがある。営業時間は8時から12時まで。土曜日と日曜日は休み。外国人がドル預金出来る銀行も幾つかある。

(ドル預金の出来る銀行一部例)

- ・BULGARIAN FOREIGN TRADE BANK - ジェラトンホテル前
- ・INTERNATIONAL BANK FOR INVESTMENTS AND DEVELOPMENT
- NO19, 2のトランバイ。

ビトーシャ通りからまがって1つめの停留所おりてすぐ。

- ・FIRST EAST INTERNATIONAL BANK - リラホテル横

両替は銀行、ホテル、両替商などで出来るが、場所によりかなりレートが異なる。一般的にホテルや銀行ではレートが悪い。ホテルと一部24時間営業の両替商を除き土曜日の午後と日曜日は両替出来ない。トラベラーズチェックも両替可能であるが現金同様場所によりかなりの差がある。一例をあげればバルカンツーリストではレートが悪い上に5%のマージンを取られるが、貿易銀行では両替額にかかわり無く手数料に1USドルを取られるだけである。

・両替(現金)

93年4月 1US\$ = 約26レヴァ 93年7月 1US\$ = 約26.9レヴァ

・定期預金 (バルカン・バンク)

	レバ	米ドル	独マルク
1ヵ月	4.2%	6%	7%
3	4.4%	7%	8%
6	4.8%	8%	9%
12	5.6%	9%	10%

札が汚れていたり、少しでも破れていたりすると両替を断られる。街では闇両替の誘いが多いが、違法な上にあまり得がない。

6 通信

1) 郵便

日本-ブルガリア間の郵便物はほぼ確実に届く。ブルガリアから日本までは平均2~3週間、その逆は1~2週間で届くと言われているが、隊員が赴任してからの例で日本から4日という短期間で届いたのもあれば2か月掛かったものもある。小型包装物は特に検査を受けることはないが、小包に関しては1つにつき10レヴァの通関料が取られる。海外向けの航空書簡は無い。航空便の料金は以下の通りである。

- ・葉書 6~7レヴァ
- ・封書 10gまで 8レヴァ
20gまで 9レヴァ
30gまで 19レヴァ

窓口の係によって料金が異なったり、地方に行くと料金が異なる場合もある。クーリーサービスは現在3社ある。

- ・DHL International -8, Tsar Osvoboditel Blvd. Tel. 88-23-09
36, Dragon Tsankov Blvd. Tel. 32-7146/3360
- ・RSE Worldwide -15A Legue St., Hotel Rila Tel. 87-14-19
- ・In Time Courier -2, Chervena Stena St., Hotel Orvita
Tel. 65-02-77/65-38-54

2) 電話

電話事情はあまり良くない。電話が遠いのと、間違い電話が多く、市内通話でさえ4、5回ダイヤルしなければならないことが多い。街に設置されている公衆電話は市内通話のみで20ストチンキ(近々50ストチンキに値上がる予定)。通話時間は無制限である。故障している公衆電話も多い。国際電話は郵便局以外に自宅からできるが、日本へはダイヤル自動化されておらず、オペレーターに申し込む。料金は1分間55レヴァ。テレホンカードもあるが、利用できる電話機が少ない。

3) ファックス

主要郵便局、電話局の他、ホテルのビジネスセンターで利用できる。

4) アナカン

赴任に際しての携行荷物は別送品を含めて全て無税通関であり、所持品の検査も無かった。尚、アナカンは日本から2週間ほどでソフィアに届く。

7 メディア

1) テレビ

放映チャンネルは2つ。その他にフランスの放送が入る。通常のテレビ放送の他パラボラアンテナ等をつければ自宅で衛星放送が楽しめる。ソフィアではパラボラアンテナを多く見かける。

2) ラジオ

国営放送は2つある。民間放送は最近増えつつあり、ソフィアで聞ける放送は約15局ある。ソフィアではアメリカのVOA、イギリスのBBC等の英語放送も聞けるが、地方では国営放送のみである。

3) 新聞

地方紙、専門紙（政治、経済、宗教、スポーツ、風俗等々）を含めると、1000種以上の新聞が国内で発行されていると言われており、「ブルガリアの新聞1000紙」という新聞リストが本になっているほどである。ソフィア市内で購入できる新聞だけでも30以上あると言われている。英字新聞は「Herald Tribune」「Financial Times」「Wall Street Journal」等が入手出来る。

4) 雑誌

発行誌は数が少なく、紙質、印刷はあまり良くない。全てブルガリア語である。英字誌は「TIME」「Newsweek」が約1週間遅れで入手出来る。「プレイボーイ」「コスモポリタン」のような雑誌も入手出来るが高い。独字誌、仏字誌は比較的入手しやすく「マリクレール」「エル」「ヴォーグ」等が簡単に購入出来る。

8 交通

1) 国内交通

A. 航空路

ブルガリアの国際空港はソフィアその他、黒海沿岸のブルガス、バルナ等にもある。ソフィア空港へはモスクワ経由、パリ経由などがあるが、今年からバンコクからの直行便が加わった。

国内はバルカン空港の飛行機がソフィアーバルナ、及びソフィアーブルガスを往復している。ソフィアーバルナは小型飛行機で、飛行時間は1時間。料金は往復でUS\$130（1993年7月現在）である。切符はバルカンツーリストですぐに購入出来る。

B. 陸路

a. 鉄道

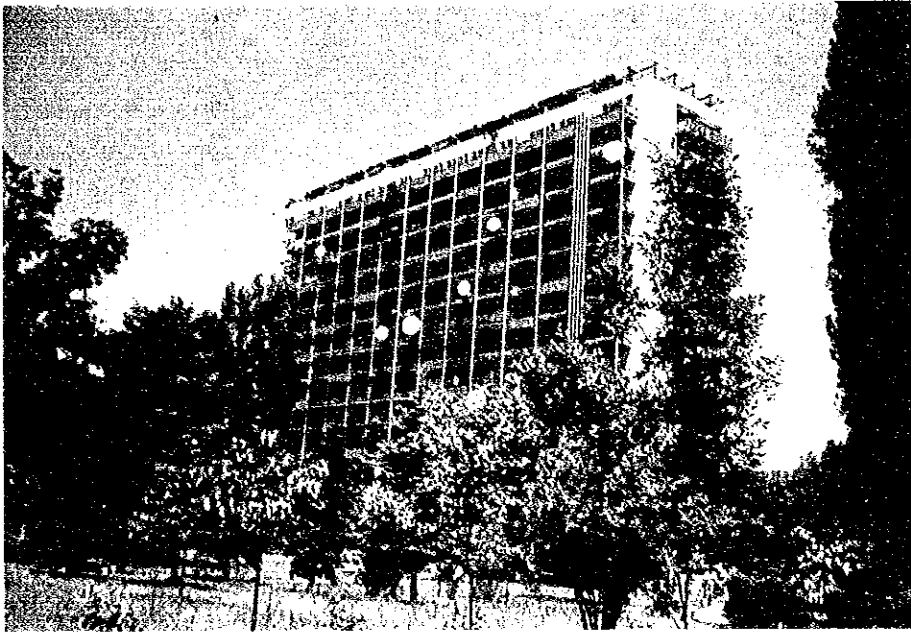
鉄道網は比較的発達しているが時間が掛かる。急行はコンパートメント式で1等、2等の区別があり、全席指定である。料金は200km程の距離（2等席）で約68レヴァである。切符は鉄道駅、国鉄予約センターで買える。

b. バス

幹線道路が発達しているため、バスや車での移動は便利である。国営、私営ともに長距離バス網が発達しており、国内のみならずアテネ、イスタンブール等の近隣諸国の主要都市にも線路がある。但し冬期の大雪時にはバスが運休することもある。バスの切符はバスターミナル、または文化宮殿（エンデカ）の下の切符サービスで購入出来る。因に私営バスでソフィアーヴェリコ・タルノヴォ（約240km）が80レヴァ、約3時間30分の行程である。

c. 海路（水路）

夏期にはドナウ河沿岸都市（ルセービディン）、また黒海沿岸の各都市間で水中翼船が運行している。



パラボラアンテナをつける家が増えている



新聞スタンド



ソフィアの人々の足
トラム (トランバイ)

バス

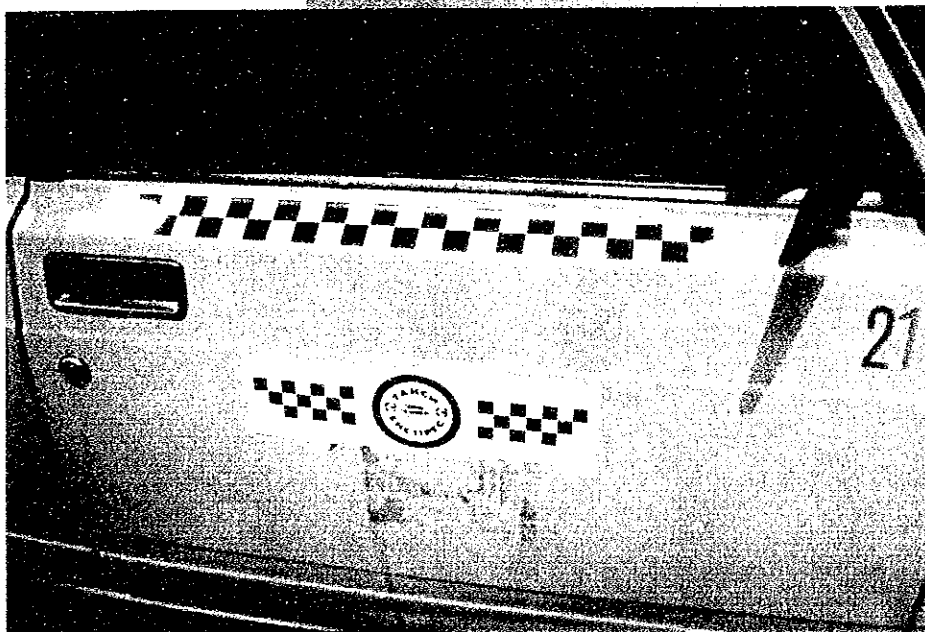
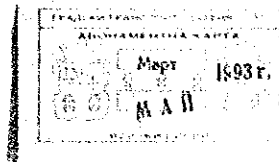


トロリーバス



黄色が停留所の目印

バス、トロリーバス、
トラム共通の3か月定期券。
6月に2倍に値上がった。



国营タクシーのマーク

9 住宅

都市では、殆どの住民がアパートで暮らしている。しかも住宅地域では12階から20階建ての同じような高層アパートが林立し、一見しただけではどのアパートも見分けがつかない。

ソフィアは人口過密状態にあり、現在ソフィア中心部より放射状に広がる形で高層住宅の建設が進められているが、作業は遅々として進んでいない。

この高層アパート住宅は鉄筋コンクリート建てではなく、ブロックを積み上げ、コンクリートで固めただけであるので、地震などに対する強度は極端に低いと言える。

住宅内部はリビング、ベッドルーム、キッチン、バス（トイレと共用）の間取りになっており、ソフィアなどの都市では集中暖房のヒーター（一か所で高温に熱せられた温水が各アパートに供給され、暖房に使用されている）が備えられており、厳寒期でも室内は暖かい。

住宅例として、現在隊員が住んでいる部屋を例にあげる。

1) 寮（ソフィア大学学生寮）

東洋語学センター（ソフィア大日本語科のあるところ）より50分ぐらいのところにある学生地区の一角にある。バスとトロリーバスを利用。一帯が学生達の住むアパート群になっており、マーケット、郵便局などがあり公園も多い。エコノミー大学、スポーツアカデミーもここにある。普通は1部屋を2～3人で使用するが、2部屋もらって使っている。シャワー、トイレ、台所（簡単な造りで使いにくいが一人数ならなんとかなる）がついている。洋服ダンス、机2つ、ベッド2つ、テレビ、棚2つ、テーブル、椅子が備わっている。台所には冷蔵庫とオーブン、電熱器がある。

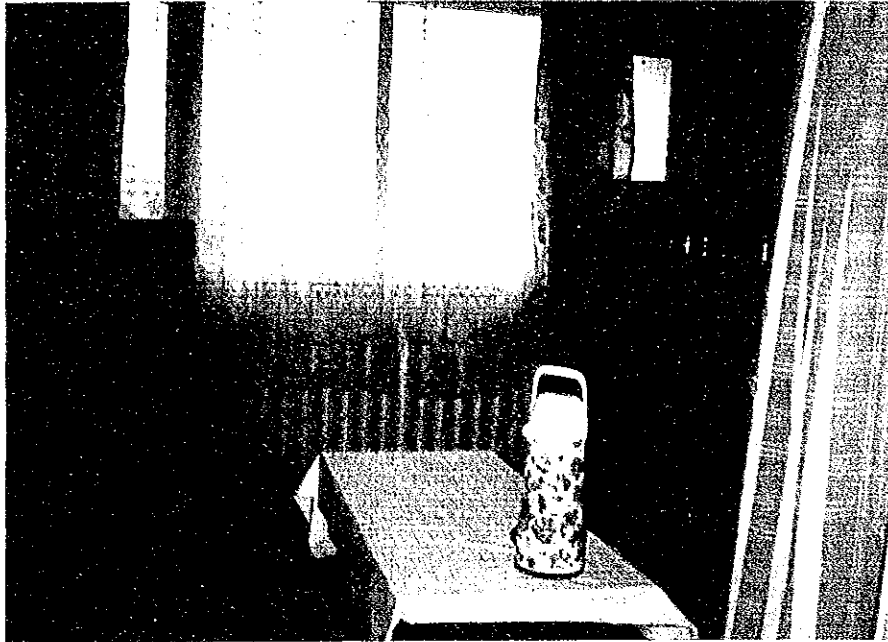
電話は呼び出しで英語は通じず、通話中の時が多い。公衆電話が1台あるが込んでいたり、故障で使えなかったりする。

鍵は外出時に受付に預け、シーツ、枕カバー、毛布カバーは交換日があり無料で交換してくれる。外部からの訪問者は受付にパスポートを預けてから中に入る。

2) アパート（地区名ームラドゥストゥ 日本 の 団地 群 の よう な 所）

ソフィアの中心にある職場まで約1時間。16階建てアパートの11階。建物、部屋はかなり古い。1か月180USドル（6か月分前払い）、光熱費、電話代別。部屋は平均的な一世帯用広さで、台所、食堂、寝室、居間、シャワー（トイレ）及び簡単な家具付き（食器類、鍋釜は無し）。

アパート群の中に小さな店が何軒かあり、簡単な買い物は可。交通手段は市電かバス。夜は暗いのでやや不安があるが、これはこの地域に限ったことではない。



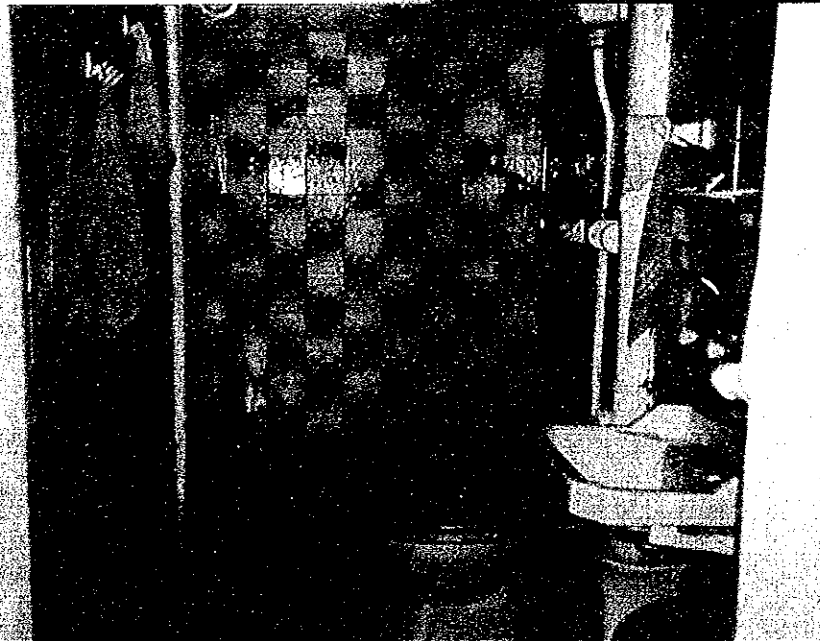
寮の部屋と台所





高層アパートが多い

台所



普通バスタブは無い

1 0 治安

一般的には良いと言えるかもしれないが、現地の人々は口を揃えて非常に悪化していると言う。

次々に新しい店が開き、品物が増えてはいるが、人々の経済状態が良くなっているわけではない。物価の急上昇でかえって不満がつり、若者たちの物欲からの盗みが増えて来ている。隊員の職場仲間でもバス内でスリや、引ったくりに遭ったり、鞆をナイフで切られる、空き巣に入られる等と被害が続いている。現金を取られたり、暴行を加えられたりという日本人旅行者の被害も出ている。赴任して数か月の間に隊員も被害を受けており、1名はイースターの日教会内で財布を盗まれ、他の1名はアパートに人居して1週間も経たぬうちに留守中ドアの鍵とノブを壊され何物かに侵入された。盗まれた物は一切無く、大家の話によると前の住人の知人が何らかの理由で侵入したのであって、物取りが目的ではなかったのだろうということだったが、それにしても日中近所に気づかれずにいとも簡単に侵入出来るということに驚かされる。

ドラッグ類も一部で出回るようになり、子供を巻き込む事件も起きているらしい。経済状態の悪化、失業、価値観の不安定等から今後犯罪は益々増える傾向にある。

普通に生活していれば、そういった事に巻き込まれる事は無いが、人前で大金を見せない、夜道の1人歩きには気をつける等の配慮は必要であろう。また、路上で声をかけて来る闇両替はトラブルのもとになるので換金しないこと。

1 1 医療事情

風土病は無いので、日本で必要とする薬（風邪薬、胃腸薬、鎮痛剤等）を準備する程度で済むだろう。但しシップ薬などは殆ど手に入らないので、スポーツ隊員は赴任前に準備しておく必要がある。

現在大気汚染が問題になっており、空気が乾燥しているので喉、鼻をやられやすい。

ウィーンの日本大使館の案内ではブルガリアの医療事情はかなり悪く、邦人の現地医療不安は高いとある。手術、長期入院は西欧（ウィーン）で行う方が安心と思われる。ブルガリアの日本大使館には医務官が駐在している。

邦人のよく利用する病院として外交団病院、陸軍病院がある。内科、産婦人科、小児科、歯科等があり、診療時間は月曜日から金曜日までの9時から14時半まで。

ブルガリア国民は診療、治療、検査は全て無料であるが、歯科だけは有料。往診も簡単にしてくれる。街中には薬屋が多くある。医薬品の購入には医師の処方箋が必要との情報であったが、現在は簡単に購入出来る。

1 2 オフィスアワー

官庁	8:30~12:00、13:00~17:30（土・日は休み）
銀行	8:00~16:00（日・祝日は休み）*営業時間は銀行によって異なる
国立銀行	8:00~16:30（日・祝日は休み）
中央郵便局	7:00~20:30（月~金）、7:00~19:00（土）、7:00~12:00（日）
商店	9:00~12:30、15:00~20:00（日・祝日は休みの店が多い）
レストラン	12:00~23:00
コーヒーショップ	8:00~23:00
ナイトクラブ	22:00~04:00
電話局	24時間営業

1 3 ショッピング

ソフィアにはデパート「ツム」があり、一通りの物は扱っている。郊外には大型スーパーマーケット「アスコ」があり、食料品などの品揃えは良いと言える。電気製品などの店や露店も多く、過大な希望を持たなければソフィアで生活物資に困ることはない。

店員の接客態度は必ずしも丁寧とは言えないが、しつこくないので良いこともある。

スーパーでは日本のスーパーと同じように商品を次々に籠に取り、最後にまとめてレジで金を払うが、スーパーではない中くらいの店ではまず売場で欲しい物を選び、レジで金を払い、そのレシートを持って売場に商品を取りに行くという方法もある。包装は殆どなく、手でそのまま持って帰るか袋を持参する。店にもビニール袋を用意してあるが大抵有料である。

一方、地方では商品の普及度は劣り、選択の余地は無い。デパートやスーパーも無く、目指す物を探しながらひたすら小さな店を訪ね歩かねばならない。

1 4 衣類

西側ヨーロッパと比べると彼らの服装はまだまだ地味で（特に冬場は）着古したオーバーを着ている人をよく見かけた（しかし、その一方では毛皮を着ている人もよく見かけたが）。暖かくなってからは服装も明るくなり、特に若い人達はお洒落な服装を楽しんでいる。年配者は頑固に厚手の上着を着ている。首都ソフィアでは、質、デザインを気にしなければ下着をはじめ、殆どの物が入手できる。（但し、靴下と男性用の下着は大変質が悪い）。個人の好みの問題もあるだろうが、日本から何もかも持参しなくても大丈夫であろう。特に現在は新しい商品が増えつつあり、ソフィアには「ベネトン」もある。

ブルガリアは、汗をかくほど暑いかと思えば翌日には厚手の上着が必要なほど寒くなったりと、大変気温が変わりやすい。そのためブルガリア人は夏になっても冬服をしまったりせず、いつでも取り出して着られるように準備してあるようである。

地方都市については、品物が極端に少ないため、地方隊員はソフィアで揃えるのが賢明であろう。

1 5 食

以前は、パンや砂糖などが配給制だった苦しい時期もあったようであるが、我々が赴任したこの冬は野菜、果物、肉、卵などが想像していたよりあり、困ることは無かった。

ブルガリア人の主食はパン、肉、乳製品であり、魚は肉と比べるとあまり食べないようである。

これまでに店頭で並んでいた食品は下記の通りである。

- ・野菜、果物類 キャベツ、サニーレタス、長ネギ、玉ネギ、じゃがいも、人参、
（季節による）大根、マッシュルーム、にんにく、生姜、瓜、きゅうり、山芋、
かぼちゃ、ほうれん草、いんげん、トマト、ピーマン、オクラ
バナナ、りんご、オレンジ、みかん、キウイフルーツ、パイナップル、
レモン、さくらんぼ、葡萄、プルーン、洋梨、グレープフルーツ
杏子、桃、すもも、アボガド
- ・肉類 牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉、ハム、ソーセージ、サラミ
*地方では常に入手出来るとは限らない。

- ・魚類 魚屋で売られている魚は種類が少なく、鮮度も信頼できない。通常黒海からの魚は冷凍されて市場に出るが、川魚は生きたままで売られている。缶詰も多い。冷凍えび、いか、ほたて貝もあるが安くない。
- ・乳製品 ヨーグルト、チーズ、牛乳、バター、マーガリン、生クリーム
- ・その他 豆、卵、米、パスタ類、パン
- ・日本食 (ソフィアでは) 醤油が入手可能。
韓国製ではあるがインスタントラーメンもある
- ・酒類 日本酒以外は何でも入手可能であるがブルガリア産のワインが特に安くて美味しい(10レバ〜)

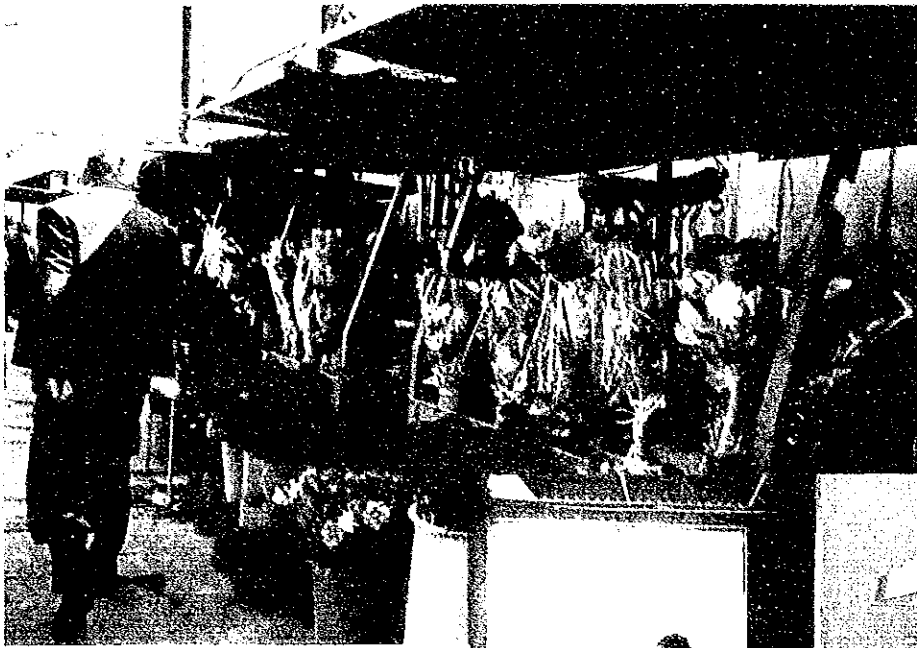
 外食産業としては、ピザ、ハンバーガーのファーストフードの店がある。喫茶店も多い。日本料理店はホテルの中に一軒あるが、高い。中華レストラン、カレーが食べられるレストラン、イタリアンレストラン、ロシアレストラン等色々あるが、そのような高級レストランを頻繁に利用するのは隊員の生活手当では難しい。ブルアリア人も一部の金持を除いてはあまり外食をせず、カフェでコーヒーを飲む程度とのこと。



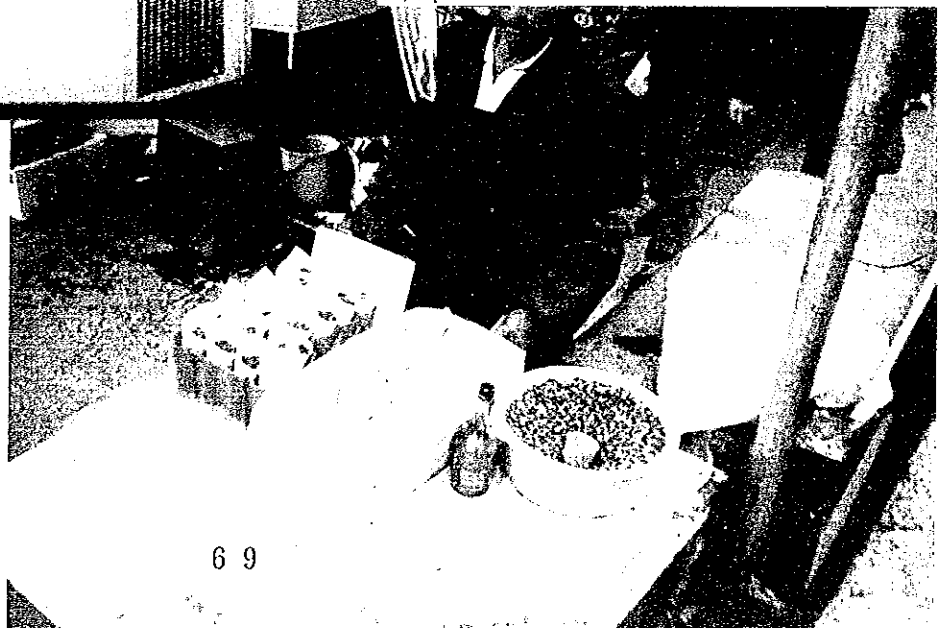
市場の店

国営デパート「ツム」





ショッピング①



ショッピング②



